



インタビュー

NPO 法人

ドットジェイピー

が、HP上の「議員NAVI」にて仕事内容の予定を公開している。議員だけでなく、ドットジェイピーは日本にある海外大使館や商工会議所、海外で活動するNPO法人とインターンシップを行う「グローバルインターンシップ」も仲介している。設立から17年でインターン生は延べ17000人を超え、一期間あたりの人数も年々増加している。

大学生ならだれでも

議員インターンシップには学部を問わず多くの学生が参加している。インターン生の専攻は、政治学はもちろん、文学、法学など様々で、理系は全体の約1割程度を占めているという。参加者の2割は将来、公務員や公共事業に携わることとを希望しているのだが、そうでない人も得るものが多い。期間中には他大学の学生と一緒にすることもあって同じ若者からの刺激もあつた。議員インターンシップを経て、現職の知事になつていくという事例もある。事前に必要な知識はあるかという質問に対し、刎本さんは「議員さんにもインターン生が大学生であることを知っているのだから、特別な知識は必要ないです。学ぼうとする意欲や姿勢は重要ですね」と話した。

議員を「知る」

議員と聞けば国会議員を思い浮かべる人も多いだろうが、都道府県議会議員、市区町村議会議員などの存在も忘れてはならない。ドットジェイピーは地方議会議員へのインターンシップも仲介している。市町村などの議員はその地域と密接に関わっており、地域のイベントなどに多く出席するので地元住民の声をよく知っている。刎本さんは「地方の議員さんはその地域で育っている人が多く、地元への想いが強いので、地方議会議員へのインターンシップはおすすめです」とも話した。

テレビやラジオ、新聞現在の主流はインターネットだろうか。私たちは常に多くの情報を得ている。どんなメディアからの情報よりも自分の経験が一番信頼できることを私たちは知っている。今回は大学生にそんな経験の橋渡しを行う「NPO法人ドットジェイピー」(以下ドットジェイピー)の関東支部代表の刎本浩紀さんと同支部の小日向拓哉さんと話を伺った。

ドットジェイピーは、主に「議員インターンシップ」を大学生に提供している。これは長期休暇中の約2ヶ月間、受け入れ先である議員と行動を共にし、政治と社会を実際に経験することができる。ドットジェイピーが受け入れをお願いすることもあつたが、議員自身も希望することも少なくはない。活動内容は議会や委員会の傍聴、広報活動、地域のイベントなど様々である。

互いが学ぶ場として

議員さんは年配の方が多く、学生と話すことで今の若者が何を考えているのかを知ることができて良かったと話す議員さんも多い。政治に若者の声

政治参加への足がかりとして

現在若者の人口が少なく、投票率も低いので若者の声を選挙で反映されていないことが問題として挙げられている。若者の投票率向上の足がかりとしてアイドルグループSNK48(選挙48)や公式キャラクターである「りっぴー」など、話題性をもたらずプロジェクトを行つてい

論説



新たに書店を見かけると、別段急いでいないときであれば立ち寄ってしまっているが、同時に書店巡りも相当に好む。特に目当ての本があるわけでもないのに、知人に尋ね、或いは他の手段を用いて書店の位置を調べる。時には、だいたいの見当を付けて地図もなく探索することもあつた。このようにして私はしばしば様々な書店を訪れ、本を読んでいる。読んで

字の如く「書を読む」ことである。元々の言葉は中国で弟子が師匠の書いた書を綴り返し読み上げたこと由来する。つまり、読書とは本来勉学のことを指した言葉であつた。言うまでもなく、読書は幼少期においては言語習得の重要な要因となる。人間は聴覚よりも視覚に依拠することが多く、話すよりも読み書きする方が記憶に残りやすいという話是有名である。ところが近年では若者の「活字離れ」が叫ばれている。活字離れとは、識字率が非常に高い国や地域において、インターネットなどのメディアの普及によつて書籍や新聞といった活字媒体の利用率が低下する現象を指す。注意したいのが、ここでいう活字離れとは狭く、読書とは、読んで

NPO法人 ドットジェイピー 2月・3月 春のインターン生 募集中 詳しくは ドットジェイピー で検索!!

義で、紙媒体以外を含まないものとしていたから、これを現代の若者が読書をしなくなつていくと断定するのは早計である。昔とは異なつて今では電子書籍なるものが流行つていくらしい。何冊もの嵩張る本の代わりにタブレット端末を持ち歩き、それをもつて読書をするという人が多々いる。ただ、確かに最近の若者は、評論や学術本を「堅苦しい」と敬遠して、読むことが少ないような気がする。代わりには彼らの読書意欲を支持しているのはライトノベルやベストセラー小説などであるようだ。しかし、これは悪いことではない。如何なる形でも私たちが『竹取物語』以来の伝統を少しでも受け継ぐことができるのだから本質的に問題ないのではない。斯く言う私も、物語文学を読むことの方が圧倒的に多い。

物語の世界と夢の世界は似ていると私は思う。私は小説を書店で立ち読みすることが多い。好きな本を読めば、その恰好のまま登場人物とともに事件の手掛かりを求めて台湾へ渡つたり、銀行を襲撃したり、遊覧船でゆっくり旅したり、城での生活を満喫したりできる。時にはまるで自分が実際に作中の出来事を体験したかのように疲弊したり、新しい発見をしたり、冷や汗をかきこきさえもある。ひよつとすると物語を読むことはオーケストラの演奏を聴くことと同じようなものかもしれない。ページを開くだけでその世界の風を感じ、美しい文章に出会う度に言葉が血管を流れて全身を巡るかのようだ。読書をするときは、恰もコンサートホールで壮大なオーケストラの演奏に身を浸すようなもの

夜と霧 新編 ヴィクトール・フランクル 119104

なのだ。奏でられる音楽から私たちは頭の中に音の情景を描き出すように、挿絵のない文字の列から私たちはその光景を思い描くことができる。漫画家や映画監督によつて半ば強制的にイメージを植え付けられるよりも、読書をして想像する方がはるかに能動的であるし、想像力を鍛えることもできる。

第二次世界大戦では人の感情が残酷な形で現れた。感情は今では考えられないような数々の行動を引き起こした。『夜と霧』は当時ドイツ占領下にあつたポーランド南部にあるアウシュヴィッツ強制収容所に一人の心理学者が収容されたことから始まる。人が極限状態に追い込まれる中、心理学者ヴィクトール・フランクルが

この第二次世界大戦は他にも多くの教書を作つてしまった。何百万ものこともよくないことだ。信じていることは、自分の心の拠り所をつくることである。心の拠り所があれば、人はまっすぐ立つていられる。ところが自分が依拠できるものを見つめるのは容易ではない。そこで私は読書を勧める。手近にある良い本は時として良い友となる。堅苦しく考える必要はない。この秋、自分の「お気に入り」の本を是非見つけてみてはいかがだろうか。

感情というものは不可解なもので私達の中に唐突に現れ、私達の中を埋め尽くす。時には自分を癒し、助ける。強い感情は悪魔ともなり、自分を傷つける。他人をも傷つける。この見えざる手は人間に必ず存在し、不可分だ。私たちがこの手をどう扱うかということが人生を左右する。

ユダヤ人を収容所へ移送した、ナチス戦犯アドルフ・アイヒマンの裁判に衝撃的なレポートを作成したユダヤ人哲学者を描いた『ハンナ・アーレント』は映画となり数々の賞を受賞した。また、ナチスからの迫害を逃れる少女の日記である『アンネの日記』はあまりにも有名である。これらも『夜と霧』と合わせて読むとより深い思想を巡らせることができる。

ユダヤ人を収容所へ移送した、ナチス戦犯アドルフ・アイヒマンの裁判に衝撃的なレポートを作成したユダヤ人哲学者を描いた『ハンナ・アーレント』は映画となり数々の賞を受賞した。また、ナチスからの迫害を逃れる少女の日記である『アンネの日記』はあまりにも有名である。これらも『夜と霧』と合わせて読むとより深い思想を巡らせることができる。

夜と霧 ヴィクトール・フランクル 著

